

10世紀ビザンツ皇帝の帝国統治と古典活動

中世ローマ帝国の世界秩序理念について

大月 康弘

一橋大学大学院経済学研究科 助教授

1 はじめに

ビザンツ帝国における古典制作について考察する場合、注目すべき幾つかの時代がある。10～11世紀もその一つである。867年に始まるこのマケドニア朝期は、帝国の歴史を通じて相対的に安定した時期であり、6世紀半ば以来縮小傾向にあった版図を再び拡大させた「偉大な時代」でもあった。この帝国の威勢と呼応するかのよう、皇帝による文化振興政策のもと多くの古典的作品が制作されたことで知られている。

10世紀のシュメオン・ロゴテテース『世界年代記』Chronicon、ヨセフス・ゲネシオス『皇帝年代記』Basileiai、皇帝コンスタンティノス7世(在位908-959年)が自ら一部筆をとった『続テオフィアネス年代記』Theophanes Continuatus、11世紀のレオン・ディアコノス『歴史』Historia、ミカエル・プセロス『年代記』Chronographia、ミカエル・アッタレイアテス『歴史』Historia、12世紀のアンナ・コムネナ『アレクシオス伝』。相次いで書き継がれたこれら重厚な歴史記述のほか、偉大な法典編纂、新規法令公布事業、有職故実の集成がこの時期には見られた。レオン6世期(在位886-911年)に完成したバシリカ法典 Basilica は、ユスティニアヌス帝期以来の偉大な法典編纂事業であったし、その後の新法群 Novellae/Nearae もまた、皇帝の意欲的な法制活動の現れだった。コンスタンティノス7世ポリフュロゲネトスは、『帝国の統治について』De Administrando Imperio、『儀礼について』De Ceremoniis、『テーマについて』De Thematibus といった有職故実、国家行事・経営に関する編纂物を編纂されている。歴代皇帝が発給した個別特権文書などのい

わゆる行政実務文書もまた興味深い。

多くの写本で伝承されるこれらの作品の存在は、当時を特徴付ける一大現象だった。いずれの作品も、ビザンツ社会での古典作成の実態を窺わせる貴重な証拠であり、様式化された記述のなかに皇帝像(イデオロギー)が片鱗を見せる点で、逸することができない検討素材である。

これらビザンツの古典は常に既存の古典作品に範を求めていた。ヘロドトスの記述に範を求めた歴史記述をはじめ、ビザンツ文人たちはおよそ、自らの「文学」活動を「模倣」mimesis の営みと自覚していたようだ。彼らの活動は、それ自体「古典の再生」という側面を伴っていた。これらの活動のすべてを隅々まで総覧することは容易ではない。個別事例の分析はもとより今後の課題であるが、ビザンツ古典世界の特徴について2・3の点に限って仮設的に提示しておきたい。

2 皇帝の職務

帝国の聖俗儀礼、有職故実に造詣が深かったコンスタンティノス7世は、自身が編纂した『儀式の書』De Ceremoniis 序文の中でこう述べている。「皇帝は、適切なる秩序と配置の中に、創造主がこの世の全体に与え給うている調和ある運動を、いと荘厳に、かくしてまたいと簡潔に驚くべきかたちで、余の臣民たちの目の当たりに映像化しうる」と。

つまり、皇帝が主宰する「儀礼」は、「天上の帝国」を地上において現前化させること、そして、地上の帝国を統べるビザンツ皇帝の権力を、神の恩寵のもとにあるものとして超越化させること、というのである。

コンスタンティノス7世の編纂になる他の作品にもこの皇帝イデオロギーの片鱗は窺われる。『続テオフィアネス年代記』の序文には、「時の経過とともに失われてしまっていたものに「新しい生命」palinzoia と

「再生」palingenesia をもたらす」ことが「皇帝」の責務として述べられている (Theophanes Continuatus, 3.15 - 4.1)。

この皇帝像は、国家活動のための公文書にも表れた。皇帝文書の結語表現には、例えば「全能者キリストの修道院についての本規律書は、第15インディクティオ、6645年10月に余の署名を付された。++++ 十神なるキリストに忠実にして、緋室生まれのローマ人の皇帝ヨハネス・コムネノス」(皇帝の修道院寄進文書から)といった表現が見られる。皇帝自身による自筆署名箇所であるこの結語表現は、ビザンツ皇帝による特権賦与文書に固有の様式であった。

「神の摂理」の支配するこの地上の世界、それを支配することが皇帝の責務、との独特の「世界秩序」像が、各文書からは垣間見られる。その世界観の彫琢、深化こそが、当時の彼ら文人たちの「使命」であったとすら見える。

3 古典活動の舞台としての「帝国」像

ビザンツの皇帝は、「神の摂理」oikonomia を地上において実現する「神の代理人」だった。そして、皇帝に統べられる「帝国」は、周辺諸民族を包含する普遍形象として観念されていた。この世界秩序観は、当時の史料群の随所に読みとれる。例えば、上記コンスタンティノス7世の編纂書『帝国の統治について』では、「ローマ人」Romaioi と「夷狄の民」Ethne の対置が機軸に据えられ、当時知られた諸民族、諸国家の君主たちが、「家父長」たる皇帝の「兄弟」「友人」「友人」と呼ばれて、いわば「神の国」のオイコス秩序論が展開されるのである (cf 渡辺金一『中世ローマ帝国』岩波新書、1981年、1 - 72頁)。その中で「ローマ皇帝」は、全「世界」の「統括者」「救済者」として立ち現れた。

ビザンツ皇帝のこの世界 oikoumene 支配観念は、他方で、国家の政治空間が物理的な境界によって区切らるものでなかったことを意味した。少なくとも、皇帝をはじめとする当時の文人、政治家は、そう考えていたようである。例えば、ユスティニアヌス1世 (在位527 - 565年)、バシレイオス2世 (在位976 - 1025年)、マヌエル1世 (在位1143 - 1180年) の再征服活動もまた、かかるモチーフに支えられていたと考えることができる。また、ゼノン帝のヘノティコン (484年)、ヘラクレイオス帝のエクテシス (638年)、コンスタンス2世帝のテュボス (648年) 等の諸施策もまた、離反

傾向にある単性論派東方教会 (アレクサンドリア教会、シリア教会)、つまり分離傾向にあったこれら東方地域を、帝国内に留保するための融和策にほかならなかった。

「神の摂理」のもとにある地上の帝国。その秩序ある運営の遂行を責務としたローマ皇帝。「世界」の全体に責任を負うというこの「皇帝」理念は、「キリスト教ローマ皇帝」のいわば文化伝統だったようである。この世界観、またその反映としての独特な国家理念は、現代の国民国家を基本要素とする国際・外交関係の認識枠組みとは根本的に異質な世界観だった。それは、まずもって周辺諸民族との儀礼的接見の場で顕著に可視化され、また、帝国統治の実際の間でも顕示されていた。外国使節との儀礼的接見の様子は、ビザンツ側史料からは直接具体的には伝えられない。しかし、コンスタンティノープルを来訪した外交使節の残したレポートが存在し、その補助的参照が求められる。例えば、のちにイタリア・クレモナ司教となるリウドブランドは、皇帝との接見の間 (マグナウラ宮殿) で見られた荘厳な皇帝の演出について、冷静な報告を残して興味深い (Liudprand, Antapodosis, vi, 5)。

「神の代理人」としての皇帝像は、帝国統治のための各種文書上にも登場する。世界支配者としての皇帝は、文書を通じて行政の現場でも顕示されていた。歴代皇帝が発布した新法、また黄金 chrysos の印璽 bulla をもって発給された個別の特権賦与文書 Chrysobullos なども考察対象となるのである。個別の文人の活動を、それを支えたモチーフとともにめぐり出すことは、今後とも興味ある作業課題である。

4 Oikonomia と Translatio Imperii

ビザンツ帝国で作成・創造された広義の文学作品は、ギリシア・ローマ文明の継承の上に、キリスト教的な世界観に規定されて独自の思想世界を出現させた。

この社会は、言うまでもなくギリシア語を公用語とした。しかしそこは、ギリシア語を母語とするいわゆる「ギリシア人」ばかりでなく、アルメニア、グルジアなど早くからキリスト教を受容した近隣諸民族、また7世紀以降には新来のスラブ諸族もがともに生活を営む世界だった。この社会は、多民族・多文化を包含する「世界帝国」だったのである。

その文学活動もまた、もちろん民族主義的、国民主義的な活動ではありえなかった。後者は近現代のヨーロッパ社会に固有の現象であり、そのような各国史的

文脈でビザンツの社会や古典を理解しようとすることは、ビザンツ古典の性格を見誤らす危険がある。ビザンツ古典には、より普遍的な価値・目的が含意されていたのであり、その中核に、諸民族、諸文化を統合する「神の摂理」Oikonomiaの観念があったことが垣間見られる。

ビザンツの古典作品は、自らの国家形象および「皇帝」を、「世界」の中心と認識していた。しかし、そのことからしてすでに、それら自身のみではビザンツ古典世界の全体像を十全に把握できないことが示唆される。ラテン語古典をはじめ「中世キリスト教世界」に固有の世界像を定位する必要がある、それらの全体を相上に乗せることが、むしろビザンツ古典研究の挑発的意義でもあるかもしれない。

その際、この「世界秩序」が、10～11世紀の経過の中で変容をきたしたことが併せて注目される。いうまでもなく、西欧世界の「王」がこの「世界秩序」の長たる皇帝の称号を帯び、実質的にもこの「世界支配」に意欲を見せ始めたことが念頭に浮かぶのである。オットー1世の戴冠(962年2月2日)、オットー2世とテオファノの婚儀(971年4月14日)、また1054年7月の教会分裂劇も、一連の「変動」過程の中に位置付けることができるだろう。

10世紀後半以降、「世界」秩序の覇権をめぐる経過は、高度な政治レベルにおいてキリスト教地中海世界の編成を深層から組み替える震源になった、とすら見

える。実際、西欧世界では、10世紀末から「ローマ皇帝」の称号を帯びる「王」の意欲的な行動が目につくようになる。都市ローマを再び「世界」=ローマ帝国の中心にしようとしたオットー3世の夢想的な復興策はその端的な例であろう。このテオファノの息子は若干21歳で夭折したから上記の計画は頓挫したが、彼が長命で、予定された二代続けてのビザンツ皇女との結婚が実現していたなら、「世界」はかなり違った相貌を示したかもしれない。

現象は政治・外交面に限られない。10世紀後半以降、西方でのラテン語による著述活動が活発化したのはよく知られるし、豪華福音書、時禱書写本もまた、皇帝の肝煎りにより多く作製・献納された(例えばライヒェナウ派の活躍)。

「神の摂理」のもとにある地上の帝国の秩序ある運営。その遂行を責務としたローマ皇帝理念。それらは、周知のように近代に至るまでキリスト教世界を規定した。ダニエル書第7章に根拠をもつこの政治的「幻影」は、ことさら中世の地中海世界にあっては、強力な社会の規定要因だったと言えそうだ。少なくともビザンツ帝国においては、古典制作活動はかかる文脈のもとでプロモートされていたと見えるのである。各作品・文書に即した検討を重ねて、ビザンツ古典世界の特徴をより内面的に把握したいものと考えている。

(B01「伝承と受容(世界)」班)

